

魚

イトウ

イトウ (Sakhalin taimen) は、サケ科の一種で、日本最大の淡水魚と言われています。国内では北海道で最初に発見されました。サケ科としては珍しく、寿命が長く、長ければ15年から20年ほども生き、体長も1メートル以上にまで成長することもあります。アイヌの伝説では、イトウはエゾシカを攻撃し、川の流れを止めることができる魚です。この魚の名前は、悪魔を意味する言葉と似ており、そのため、ネズミからヘビまで何でも食べる獰猛な生き物と信じられていました。

現実では、イトウは主に小さな魚を食べます。かつては東北地方にも野生のイトウが生息していました。今では国内で野生のイトウはほとんど見られません。阿寒湖でも野生のイトウは絶滅したとされており、代わりに、養殖され、放流されたイトウが生息しています。

ヒメマス

ヒメマス (kokanee salmon) は、ベニザケ (sockeye salmon) の陸封型です。ベニザケは川で孵化し、(2〜3年生活し) 海へ向かって川を下って行きます。3〜8年で成熟し、再び川に戻ってきて産卵し、その後死にます。ヒメマスは、遡上したベニザケが火山噴火などによる地形変動で、阿寒湖に閉じ込められ、淡水条件下で一生を過ごすよう適応したものだと言われています。

ヒメマスは成魚になるのに約3年かかります。川の澄んだ水に卵を産み、その後まもなく死にます。阿寒湖のヒメマスは、水産業用として国内の他の湖でも移入されています。

ワカサギ

ワカサギ(Japanese smelt)は、体長わずか10センチほどの小さな魚です。主にプランクトン、小昆虫の幼虫のような生物を食べます。極めて適応性があり、様々な河川の他にも、湾、湖、下流河川などに生息しています。

1月から3月には、凍った阿寒湖の上で、冬のワカサギ釣りという珍しいスポーツに挑戦できます。阿寒湖のワカサギは、北海道の北岸にある網走湖から移入されました。それ以降、阿寒湖で主要な魚の1つになりました。